

二上山の自然

6

二上山の昆虫

山口龍治

身近な生き物たち

自然豊かな二上山は、昆虫たちのオアシス。春、花から花へとぶんぶん飛び回るハチ、夜のとぼりに明かりをともしホタル、夏の太陽の下で大合唱するセミなど、さまざまな昆虫が生息しています。まるで輪廻のスパイラルを繰り返すように、こ

の山を拠点に生まれては消えていく小さな生命たち。私たちの身近なところで暮らしているそんな昆虫に目を向けてみませんか。愛嬌のあるしぐさは人の心を躍らせ、ひたむきに生きる姿は大きな感動を与えてくれます。

セグロアシナガバチ(メス) [スズメバチ科]

越冬を終えたアシナガバチは、単独で巣作りをはじめます。最初は1匹で巣作りと子育てをしなければなりません。幼虫が増えれば大変忙しくなります。暑い日は巣の所々に水を付け、羽でエアコンの代わりもします。その頃に梅雨に入り餌を獲りにいけなくなり、子育てを放棄することもあります。軒先でほったらかしにされた小さい巣がそれです。子煩悩なハチにも、このような悲劇が起こります。



ゲンジボタル(メス) [ホタル科]

ホタルは今から30年以上も昔、二上山麓には夜空の星の如く乱舞していました。この様子を「ホタル合戦」と言います。『ほたるの宿は川端柳……』と歌われた童謡「ほたる」の歌声もホタルの減少と共に消え去ろうとしています。

幼虫は(約10ヶ月)水中生活することが知られていますが、国外では例がありません。光のシグナルは、オスとメスで違い、互いに識別しています。点滅時間は関東に比べ短いようです。



カブトムシ(オス) [コガネムシ科]

黒褐色のたくましさを感じさせる体から人気があるカブトムシは、虫車と呼ばれ、軽い車の玩具を引かせる遊びもありました。年代が下がるにつれ、大きさや数を競い合うようになくなりました。そんなに捕れば、いなくなるのでは……と言う人もいますが、カブトムシが育つ環境(雑木林)を多く残せば、その心配はありません。自然の中で、カブトムシを見つけて、大喜びする子どもたちの笑顔を絶やさないようにしたいものです。



ヒグラシ(オス) [セミ科]

20種類いる日本のセミのうち、二上山には8種類が生息しています。ヒグラシに限らず、セミの一生の大半が土の中で幼虫時代を過ごします。その期間は、種類によってかなりの差があるようです。土中にいるので、その追跡調査が難しく、ヒグラシはまだ解明されていません。

俳人・松尾芭蕉の名句『閑かさや岩にしみいる蟬の声』の蟬の種類は、芭蕉しか知りませんが、ヒグラシだと言われています。



ヤマトタマムシ(メス)【タマムシ科】

タマムシと言えば、法隆寺の国宝「玉虫厨子」が有名です。玉虫の羽をちりばめた復元品もあります。

玉虫のことを昔は、「吉兆虫」と言い、羽根をタンスや財布に入れると、服やお金がたまると言われ、福を呼ぶ虫として親しまれてきました。黒い玉虫はメスとされていますが、ウバタマムシという別種です。真夏に二上山麓のエノキ(ヨノミ)の木を探せば、見つけれられるでしょう。

ハラビロカマキリ(メス)【カマキリ科】

クヌギなどの雑木林にも多く見られ、カブト虫を捕りに行ったときよく見かけます。幼虫は平たい腹の先をシャチホコのようにそり上げているのが特徴です。カマキリの前足を「捕獲肢」と言い、食物である昆虫を捕るのに都合がよく、その巧みさは逃げ足の早いトンボやチョウも一瞬のうちに捕らえます。ハラビロカマキリはとても獰猛で、スズメバチを捕食するところも観察しました。



アオマツムシ(オス)【コオロギ科】

お盆を過ぎた頃、公園や庭木の梢から「リーツ、リーツ、リーツ」と甲高い虫の音が聞こえてきます。この虫は、中国南部原産のアオマツムシです。東京の赤坂で見つかった以来、全国的に増えていき、関西では1970年頃に広がりをはじめました。香芝市では、74年の秋に二上小学校の植え込みの木で鳴いているのに気付きました。今では夜になると、いたるところの木々で大合唱が聞けます。



コシカスカシバ(オス)【スカシバガ科】

ガとチョウは鱗翅類に含まれています。鳥などに食べられそうになったときは、逃げるしかありません。敵の目をごまかすために、自然の中にとけ込んだり、毒のあるチョウに似せたり、武器を持っている昆虫に似せたりして、身を守っています。これを「擬態」と言います。

コシカスカシバは姿だけではなく、羽音も聞こえ、飛び方もハチに似ています。つかむと腹を曲げて刺す動作まで真似るのは驚きです。